

新島襄 有馬温泉を推奨

八重のレシピ再現菓子販売 旅館

病弱 湯治で度々訪問

NHK大河ドラマ「八重の桜」の主人公・新島八重（1845～1932年）と、同志社を創立した夫・襄（1843～90年）が晩年、病氣療養のため有馬温泉（神戸市北区）に何度も湯治に訪れていたことが注目されている。襄は1日に1、2回入浴して「大いに益するところがある」と教え子らに推薦。旅館側も八重にちなんだ土産品の販売をするなど、PRしている。

（虎走亮介）

二人と神戸との関わりを 藩士の家に生まれた。航海調べている神戸学院大の谷 術を学んでいた19歳の時、口義子・非常勤講師（地域 帆船で江戸から現在の岡山学）によると、襄は江戸末期 県倉敷市に向かう途中、神戸に上州安中藩（現群馬県）の 戸・須磨海岸に立ち寄った。



結婚当初の新島襄と八重（1876年撮影）—同志社大提供

そば好きだった襄は地元名物だった「敦盛そば」を食べ「6杯も平らげた」と父への手紙につづったという。このほか楠木正成の墓所や生田神社、清盛塚を訪れ、絵入りの紀行文を残した。また、襄は知人や教え子との書簡で「病魔の囚人」と称するほど、健康面に不安を抱えていた。心臓病やリウマチ、ぜんそくなどを患い、「京都の氣候がよくない」と記し、寒さを避けられる療養の地として神戸を好んで訪れた。

二人は1886年8月、東垂水村（現同市垂水区）に滞在。海水浴を楽しみ、八重はこの時、襄の容体について「動悸の異変を覚えるようになった。しかし、心臓病であったとは知らなかった」と記録している。2年後の冬にも4か月半、

神戸に家を借りて療養生活を送った。89年8月にも再び同村で静養した。

襄は同月20日、有馬温泉を八重と訪ねた。「1日に1、2回入浴し、炭酸水を飲んだ」と教え子に手紙で伝え、「大いに益するところがある」と有馬温泉を薦めている。それから5か月後、襄は急性腹膜炎のため、46歳で死去した。

二人が度々訪れていたことにちなみ、**同温泉旅館「月光園」は「八重のジンジャブレッド」（900円）を1月から発売している。甘党だった襄のために八重が手作りした洋菓子の一つ。レシピを再現したという。**
「売れ行きは好調」という。
谷口非常勤講師は「襄と八重は大学設立に奔走する大切な時期に神戸や有馬を訪ねている。二人にとって神戸は西洋の気風を感じられ、心身の疲れを癒やせる特別な場所だったのでないか」としている。